

---

# CrossWord

ユニコーン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

CrossWord

### 【Nコード】

N3447V

### 【作者名】

ユニコーン

### 【あらすじ】

魔術学校に通っていた真言は、ある時鬼神の力を身に宿す。その赤く紅い左眼のため、様々な困難に巻き込まれる真言。出会いと戦いの果てに真言は何を見つけるのか。

さてこの物語は、ハッピーエンドを迎えられるのか？

## 第1幕・鬼神伝説

今から千年ほど前、この地には鬼神や殺人鬼、吸血鬼など、人々に害をもたらす様々なモノがうろついていた。これらのモノ達は「天魔」、つまり人々の生活を乱す悪魔と呼ばれ、恐れられていた。

そこでこの地の人々は、「天魔狩り」を行おうと考えた。力のある者、戦う意志のある者は皆、天魔たちを殺しに出かけた。そのおかげで、天魔は全て滅したはずだった。

しかし、生き残りがいたのだ。一番勢力を奮っていた鬼神の生き残りが。その鬼神は子孫を次々と残し、自らの力をその左眼に託し死んでいった。そして今に至っても、その子孫がこの世界にいるというのだ。

「ふん。こんな伝説、バカバカしい」

歴史書の一小節を読み終えた鵬おおとり 真言まことの言葉はこれだけだった。

「おいおい真言くん？その反応はまさか信じてないな？」

クラスメイトであり親友である無月むつき 晃あきひがあきれたように言う。

「さあな」

そう言うとき真言は、ばたんと歴史書を閉じてしまった。

「…そんな事言ってる、今に鬼神の呪いを受けるぜ。ヒッヒッヒッ」

両手を胸の前でたれ下げ、幽霊の真似(?)をしている晃の隣で、真言は馬鹿らしくため息を吐いた。

ここはヒヤラマンという国の中心地コアに位置する中学校。と言っても、普通の学校ではない。魔術学校だ。

この国は一見平凡な国に見えるが、実は沢山の魔術師が住んでいる。もちろん人間もいるが。

真言はこの学校の二年C組である。

まあそれはさておき、一日の授業を終え、くたくたになった真言は、自分の生活している学生寮にむかった。その最中、校庭を横切ろうとしたそのとき。

ひゅッ

微かに後ろで空を切る音が聞こえた。それと共にいやな予感。

真言は思わず右に体を動かしていた。

ドゴッ！！

左から音。そして、見えたのは誰かの右足。

「お見事マコト。さすがは成績優秀者、はいはいはい。でもね、問題点が一個、おありのようですよ」

背後から、怒りのこもった少女の声。

やはり、あいつだ！！

「なんなんだよ一体…。俺は疲れてるんだ。勘弁してくれ」

「へ〜っ。忘れたんだあ。そんなこと許されると思う？」

真言の後ろで仁王立ちになっているこの少女は、クラスメートの「かみしば神芝 霞」。かすみ。男子に恐れられているらしい。（霞と対等にやり合えるのは真言くらいだ。）

「ちよちよつと落ちて着こうぜ。で俺がなにを…って…あ…」

冷や汗が出る。

「思い出した？あんたがあまりに掃除サボるから。で今日もサボったでしょ？だから先生にチクる代わりにあたしの攻撃魔法の練習台になってもらうわよ」

しまったー！！と頭をかかえる真言。

「そういう約束だったもんね？」

許してくれえ！！と土下座する真言。

「一億回土下座しても許さないよ？約束どおりにしない限り」  
うわああああ！！と逃げまわる真言。

数分後。笑う霞の前に、ボロっちくくなつた真言が、いた。

夜。本当にへ口へ口になつた真言は、軽いいびきをかきながら熟

睡っていた。

唯今午前二時頃。学校はシーンと静まり返っている。

そんな中で、真言は猛烈な左眼の痛みを目を覚ました。

「う…あぁっ！」

(なんなんだこれは?!)

左眼だけが痛いのだ。真言は汗びっしょりになっていた。

しかし、しばらくすると、痛みはだんだんとおさまってきた。

考える前に、睡魔が襲ってきて、真言は再び眠りについた。

「大丈夫、異常はありません。まあ念のため、授業後にまたきてください」

医務室の先生が、眼を調べた後に言った。

真言は昨夜のことが心配になったので、一応来てみたのだ。

しかし、異常はないという。

真言は少し安心すると共に、あまり考えないことにした。

この時の真言は、知る筈がなかった。これが何を引き起こすかを。

「おい真言。お前どーした？」

「は…？」

昼の休憩。晁にふいにそんなことを言われ、真言はビクツとした。

「今日のお前。なんか先生に注意されまくりだったじゃねーか。ポ

ーっとして」

それに、と晁は言い、真言の顔を覗き込んだ。

心臓の鼓動が高鳴る。

「お前、目つきがキツイぞ？なんかいつもと違う」

ど、どういうことだよ、と言う代わりに、真言はごくりと唾を飲み込んだ。

「き、気のせいだろ？」

そう言った真言の頭に、昨日読んだ鬼神伝説のことがよぎる。

……左眼。

「おい真言。何かあったのか？それなら言えよ？」

「い、いや何もない。昨日夜更かししちまったからかもな」とつさに嘘をつく。

「そうか。まあなんでも俺に相談しろな」

本当は教えたい気分だったが、変なことをいって晁を混乱させたくなかった。

真言は今日もため息をついた。

真言は再び、医務室へきていた。ドアをノックする。

「はい入って」

のんきな声が聞こえる。

「真言君じゃない。さあこつちに……っつ？！その……っ眼は……かはっ、と先生の口から血が飛び出した。

「うっぐ……あっ……！！！」

「せ、先生?!俺の眼がなにか?!」

「あああああ！」

先生は真言の眼から目を離さないまま、地面に倒れ伏した。

「?!」

先生の瞳は虚ろに開き。そして、

「息……してない?!一体なにが……!!」

死んでいた。

## 第1幕・鬼神伝説（後書き）

こんにちは!!!

初投稿したユニコーンです。

こんな駄作を読んで下さった方ありがとうございます!!!  
主にシリアスシーンが多くなると思います。

真言「よろしくな!!!」

次回。先生はどうしたのか。真言の左眼は?!

霞「次回は”目覚めた鬼神”よ。ね?マコト。(ニクニク)」

真言「(……………汗)」

## 第2幕・目覚めた鬼神

此処は謎の世界。何処にあるのかも解らない。何時にあるのかも解らない。

ただはつきりしているのは、此処が真言たちの住む世界とは全くかけはなれた、時空を超えた世界であるということ。

「ああ。鬼神の力が目覚めましたね」

「ええ。そうですね」

「これからが楽しみですわ」

「はい。楽しみです、私も」

暗い中に、二人の少女の声が響く。

その声は暗く沈んでいた。そして、二人の声はとてもよく似ていることが解る。

突然、暗闇が拭い取られるように消え、そこに二つの少女のシルエットが浮かび上がる。

その二つの影は、同じ形、同じ背格好をしているようだ。

しかし、その二人の少女の正体は、まだ解らない。

「せ…先生?!」

真言は死んだ先生を前に呆然と立ち尽くしていた。

『その…つ眼は…』

「なんなんだよ?!俺の眼がどうしたっていうんだ!!」

真言はおそろおそろ、医務室に備え付けられた鏡へと歩き、覗き込む。

そこには、

「え…?な、なんだよツこれ……。なんだ、よ……。あ、ああああ!」

真っ赤な血の色をした左眼が、鏡に映されて静かに真言を見ていた。

右目はもともとの茶色だったが、左眼だけは、たった今流れ出たばかりの鮮血のようにどこまでも紅かった。

それだけではない。その真つ赤な瞳の奥には、殺意、憎悪の念がありありと映し出されていた。

「嘘……だろ」

もう一度、鏡に映る自分の左眼を見直してみる。

眼の錯覚などではない。

紅い瞳は、依然として、静かに真言を見つめているだけだった。

真言はがくがくするひざを無理に動かし、鏡から離れた。ずっとこんなものを見続ける自身がなかった。

真言は医務室を飛び出す。そして寮の自分の部屋へと走る。

筆笥の上の歴史書を手に取った。

(……………違う、俺のせいじゃない！絶対に……………でも、普通だった先生が突然死ぬなんて！！やっぱり……………！！)

真言は頭をブンブンと振り、出かけた己の考えを否定する。

(違う、そんなはずがない　　これは単なる……………ッ！！)

思考が止まる。

歴史書のページをめくっていた手が止まる。

真言の目は、ある1ページに釘付けになっていた。

### 【鬼神の眼の特徴】

「これ……………」

【特徴1】 鬼神の左眼は血のように紅い色をしている。

【特徴2】 その紅い色は血を意味し、左眼を他人が見ると体内から血を吐き出し死んでしまう。

【特徴3】鬼神たちは人間に対して強い憎しみを抱いていたため、子孫の左眼にもその憎しみの念がこめられている。

【特徴4】鬼神の力は時々暴走し、とんでもない事を引き起こす原因となる。左眼の持ち主さえその暴走を止めることは出来ない。

つまり、医務室の先生は。

真言の左眼のせいで、死んだ。

「う、わあああああああ！！！」

真言は叫んでいた。叫ばずにはいられなかった。

「俺が…？殺し、た…？嘘だ…ッ！」

しかし、歴史書は現実を物語る。

心は動揺し、逃げ出したい衝動にかられた。

あんなに馬鹿にしていた伝説なのに。そんなことがあるか。

結局、真言は鬼神の子孫だったということ。

それだけだった。

真言はただ呆然と、夕闇に包まれた窓の外を見つめていた。その時。

「おい真言！！どうしたんだ？さっき叫び声が…」

隣の部屋の晃が駆けつけてくる。

真言は慌てて左眼を手で隠した。

「く、来るな…ッ！！お前まで…」

「…？どうしたんだ？なんだお前まで…って」

「とつとにかく大丈夫だから行け！！」

「でも…」

晃が言ったとき、保健委員の男子が、走ってきた。

「おいあきら！お前保健委員だろ？委員長の霞が呼んでるぞ。実は

…医務室の先生が、死んでるらしいんだ！！」

「！！！」

真言はビクツとした。

もし死因を調べることになったら、自分のせいだとばれるかもしれない。

まずい…!!

「真言、悪い！なにがあつたか知らないが、後で聞く。待っててくれ」

そう言つて、晃は走つて行つた。

「ごめん、晃。俺、その言葉を実行できそうにない」

真言は親友の背につぶやいた。

そう、真言は決心したのだ。この学園から去ることを。

真言は、寂しそうに笑つた。本当に寂しそうに。

バツと後ろを向く。

自分の部屋は、改めて見直すと散らかつている。

(この部屋も最後だな)

しばらく名残惜しそうに見つめていたが、思い切つて寮玄関まで走つた。

「さよなら、みんな」

つぶやいてみる。

未だにこの状況が信じ切れていない。

しかし真言は、校門をくぐつた。気持ちと共に。

これから先の幸せな未来を夢見ながら。

## 第2幕・目覚めた鬼神（後書き）

真言、学園を去ってしまいました！！

えー真言君、今の気持は？

真言「やっぱり寂しいな。晃とも、他の奴とも離れちまうし……」  
でも、晃や霞の出番はこれで終わりではありません！！

次回、新たな登場人物が出てきます！

晃「次回は”造られた魔術師”だ」

真言「よろしくー！！」

### 第3幕・造られた魔術師

暗闇の中で響く、少年の荒い息遣い。

ポタポタと何かが滴り落ちる音。

そして、

「諦めて下さい。其の体で出来る事はもう無いでしょう」  
感情のこもらない女性の声。

その前にいる少年の体は所々無残に引き裂かれ、やっこのことで立っている。

「いやだ…！せつかく見つけたんだ…お前の中に、心を…！」

「そうですか。聞き分けの無い小僧ですね」

ヒュッ！と、少年の背後で音。少年はハッとして避ける。

しかし、

ザクッ

「ぐう……ッ！」

避けるよりも、攻撃の方が速かった。

少年の体は、空中に赤い弧を描いて地面に転がった。

そこに、女性が近づく。

「そろそろこんな茶番は終りにしませんか？貴方もこれ以上苦し  
無いで済みますよ？」

そう言って、握っていた日本刀を振り上げた…。

しまつたな…

鵬真言は思った。

学園を出てきて、テキトーに歩いていたのだが、左眼が隠されてい  
ない事に気付いた。

今までは、夜中だから誰にも会わなかったのだが、このまま左眼  
をさらしていれば誰かが通りすがった時に大変なことになる。それ

に学園から離れるのに夢中で、戻ろうにも今までの道のりなんて覚えていない。

(なんかいいもんはないか？眼帯なんて、うまく落ちてたり…しないよな、絶対)

左眼をなんとか手で隠して彷徨い歩く。

(どっかに…なんか…)

「あっ！」

真言は叫んだ。

目の前に、ぼろぼろの白く細長い布を見つけたからだ。

手に取って見る。

(ちょうどいいじゃねえか！！まさかこんな簡単に見つかるとはな！)

そして布を左眼に巻いていった。端を頭の後ろで結ぶ。

「寂しいもんだな片目が見えないって。世界が狭くみえるぜ」  
言ってみてちよつと笑ったその時に。

「ぐう……ッ！」

誰かの呻きが耳に飛び込んでくる。

「！！こつちか！」

真言の右隣には、暗く暗い路地があった。そこから、今度は感情の抜けたような女性の声が聞こえてくる。

真言は思い切ってそこに足<sup>戦場</sup>を踏み入れた。

……女性が日本刀を振り下ろした、

しかし、その時の手ごたえは、肉を斬るものでは無く。

キンッ！

金属音が響いた。

「な……………?」  
「くつ……………火風破かふうは!!」

少年が叫んだ瞬間、指先から陣が出現し、そこから炎が無数の矢と  
なつて降り注いだ。

ドオン、と大きな音を立てて、それらは地面にぶつかると。

「く、あはつ。あははははッ!!少しは楽しませてくれるじゃな  
いですかあ」

煙の後ろから、女性の声が聞こえた。

「……………っ?!」

「此の様な物で私を倒そうなど…甘いにも程があります、よっ……

……………」

「ぐっあ!!」

ハイヒールの尖ったつま先で、少年の腹を思い切り蹴飛ばす。

「ほらほら如何したんですか?もっと凄い力使って下さいよ。あ、  
其の状態じゃ無理ですか」

何度も何度も、少年を蹴り続ける。

しかし。

「おいてめえ!!」

突如かかってきた声に、女性の動きが止まる。

「何のつもりか知らねえが……」

そこには、

「人をそんな風に扱ってんじゃねえぞ!!」

鵬真言が立っていた。

「貴方…誰ですか?私は他人に見られない様に此の幻の空間を作っ

たというのに。それを破つて来るなんて……」

「幻……？この空間が？」

今、真言の前には、意識を失った黒髪の少年と、青いロングドレスを着た茶髪の女性がいた。

「そうです。其れも気付か無かったですか？……ああ、何か人間では無い物を感じますね。鬼神、ですか」

「?!なんでそれを……」

「其れぐらい気配で解りますよ。其れで？貴方は私に如何なる理由があつて此処へ訪れたのですか？」

「もちろん……」

次の瞬間、左眼が空気に触れる。外れた布は落ちて真言の指に捕らえられた。

「こいつを助けに来たに決まってるだろ……」

そのとたん、女性がニヤリ、と笑った。

「凄い力ですね鬼神の力は。……欲しい……」

真言は、背筋がぞくつとするのを感じた。

「なんだお前は……！普通の人間じゃないな……」

そう、普通ならば、この眼を見て血を吐き出し死んでしまう筈。

「私は一体何だと思えます？……知って居ますか？」

……感情の無い、ロボット人造人間と呼ばれる存在を！

「！」

### 第3幕・造られた魔術師（後書き）

さあ今回はちよつとばかり戦闘っぽくしてみました。  
少年の名前は、次回明かされます。

次回、少年はどうなるのか？女性は？

真言「次回は“ロボット人造人間”だ」

よろしく願います！！

## 第4幕・人造人間

「人造人間……？」

「そうです。魂たまごの無い唯の器、其処に計算機能や音声など様々な機能を付けた唯の機械という所ですかね」

無表情のまま、彼女は続ける。

「それなのに此奴は、私の中に魂たまごを見つけた等と言うのですよ。其の様な物は在る筈が無いのに」

魂たまごの無いただの機械。

その言葉に、真言は聞き覚えがあった。

いつかの、魔法学校での授業。

『皆さんにはあまり関係の無い事ですが、この世界には人造人間というものがいるんです。教科書〇〇ページ開いて下さい。それらは自分の意思によって動かず、人の手によって造られ、魂たまごというものが無く、そして……』

「そして私は、人を傷つけ殺す為のみに造られたのです」

「人を、殺す為だけ、に……」

つぶやいてハツとした。

自分がそうではないか、と。

この身に宿る鬼神の力は、人を殺す事しか出来ない。

人を傷つける事しか出来ない。

医務室の先生が吐き出した血の色が、鮮やかに脳裏に蘇ってくる。

真言は、冷汗をかいていた。震える拳を、ぐつと抑える。

「はぁ、怖いんですね自分が。恐れて居るのですね？其れでは私に勝つ事は一生掛かっても無理ですよ」

真言はギリ、と歯を食いしばると、決意したように女性をキツと見据える。

「俺は、お前を倒す！まだ鬼神の力の使い方もよく知らないけど、これで試せるしな」

左眼が、紅く煌めく。体が急に軽くなり、真言は走った。女性に向かって、恐ろしい程のスピードで。

ずぶっ！

次の瞬間、妙な音と手応え。

真言は自分の右手を見て目を見開いた。

真言の右手が、女性の喉を貫通していたのだ。

それなのに、女性は笑っていた。そして、後ろに一步身を引く。

ずるりと音を立てて真言の右手が引き抜かれる。喉には黒い大きな穴が開いていたが、それも一瞬にして元に戻った。

「っ！」

真言の右手が痺れたようになり、動かなくなる。

「な…何をした?!」

真言は叫ぶ。

「何もして居ませんよ？私は。其んな事は私の創造者に聞いて下さい、ねッ！」

笑って言うと、女性は日本刀を振り下した。

(まずい!!)

真言は武器など持つてはいない。しかし、まずいと思った瞬間咄嗟に左手を出していた。

響いたのは金属音。

「な…?」

真言も女性も、驚いたように目を見開く。

真言は素手で日本刀を受け止めていたのだ。左手が、左眼と同じように紅く光っていた。

「其の位の事は出来る様ですね」

女性はニヤリとし、更に日本刀を振る。

真言は必死でそれを受け止め続けた。

「受けているだけでは勝てませんよ」

「ぐっ?!」

真言の鳩尾に回し蹴りが打ち込まれ、後方に吹き飛ばされた。

ゲホゲホと咳き込む。

「やはり戦闘経験の無さそうな貴方は弱いですね。魔力だけ強くても」

「なん…だと?!」

真言は立ち上がった。女性をこれまでに無い程強く睨み付ける。

左眼の紅い光が強くなる。

「俺を、馬鹿にしてんじゃねえぞ!!」

左眼から溢れる紅く熱いエネルギーが空中を裂き空間を不自然に歪ませた。

そしてそのまま、女性の心臓辺りを貫いた。

「あつ、あああああああああ!!!!」

女性の絶叫が、造られた空間にこだました。

#### 第4幕・人造人間（後書き）

更新遅くなつてごめんなさい！！そして少年の正体を明かせなくて  
すいません！！

次回、真言は女性を倒せるのか、そして今度こそ少年の正体は？

真言「今回は“戦う者”だ」

お願いします！！

## 第5幕・戦う者

空間が、歪む。真言の視界が曲がりくねり、ぼんやりとかすむ。そして、女性がゆっくりと地面に倒れるのを一瞬瞳に写し、視界は真っ白な闇に塗り潰されていく。

そこに、何も見えないはずの白い闇に、色が戻り、音が戻り、そして、見えた。

「じゃあ私のこの体を渡せば父さんと母さんはまた生き返ってくれるんですね？」

茶色い髪の幼い少女は、問う。

「ええそうですね。ですから、約束して下さい。君がその体から魂をなくしたとき、体を私に渡してくれると」

低い、優しいな、しかし底なしの暗さを秘めたような男の声が流れるように過ぎる。なぜか二人の顔は、影のようにぼんやりとゆらめいて見えない。

「はい。こんな私でいいのなら。そして、殺された父さんと母さんが蘇ってくれるのなら」

そしてもう一度、辺りは白い闇に包まれた。聞こえる。

「何故貴方は私に出来もしない約束をさせたんですか?!父さんと母さんを生き返らせるなどと言って!本当はそんな事やれる筈なのに!貴方はいったい何がしたいんですか!」

青いロングドレスを着た女性が、あの男に叫んでいた。

「私がしたい事:そうですね、ありますよ。でも君に言っても解らないことだ。とにかく約束したのですから、果たしてもらいますよ?嫌なら私を倒すことですね」

気の抜けたような声で、男は言った。

最後に見えたのは、歯を食いしばり男へ向かって行く女性の姿だった。

バシィッ！

真言は頭に強い衝撃を受けて我に返った。  
ズザザッ、と床を滑る。

「私の中身を勝手に覗かないで！！」  
泣きそうな声。前を見ると、上半身を起こした女性が真言を弾き飛ばしたことがわかった。

ああそうかと、真言は思った。

この人造人間は元はただの、普通の少女だったのだ。  
騙され、体を利用され、人造人間として造り変えられたのだ。  
おそらく、殺された後の体を。

「ふざけんな……」

真言は呟く。

「ふざけんなよ！お前はそれでいいのか？！このまま支配されて人を殺し続けてもいいのかよ！！」

真言は、叫ぶ。とてつもない怒りが湧き上がってくる。

(もう一度……)

女性ははっと目を見開いた。

「もう一回、お前の魂の中に入ってやる」

真言の体全体が紅い光に包まれた。

「らあああああ！！」

ドン、と真言の体が女性に直撃する。

再び視界を覆う白い闇。そこに、銀色の太い鎖が見えた。

(この鎖は……?)

何をすればいいか解らず、戸惑っている真言。その耳に、

『切れ！』

少年の声が届いた。

『その鎖を……切れ。そうすれば……』

苦しげなその声に、真言は何故か従わなければならないような気がした。

(よし……)

紅いエネルギーが全て鎖へと向かっていく。  
ガキン。

光る欠片が飛び散る。そしてその欠片は、落ちて白い闇の底に届く前に消えてゆく。その景色を見ながら、真言の意識は消えていった。今自分の魂こゝろの中から戻ってきた少年を見下ろして、女性は自分の体が透けていくことに気づいた。

（私にも…魂こゝろという物があつたんですね）  
どうして今まで気づけなかったのだろう。

あの男の言葉を信じていなければと、今更になって後悔する。

「父さん、母さん、今から行きます」

天の父と母に向かって呟く。そして、

「有難う」

目の前の少年にそう言い残し、消えていった…

男は、目の前のモニタを見ていた。そこには、あの女性の人造人間ロボットの顔写真が写っている。そして写真の下や横には、緑色に光る文字がぎっしりとしきつめられている。

黒い画面から、音声こゝろが流れる。

『ロボット 人造人間 A - 139f 崩壊。鎖の切断による消滅。支配者との所縁は切れました』

ピピッ、と画面が変わる。そこには鵬 真言の顔写真と緑の文字。

『鵬 真言。十五歳。強い魔力を持つ』

それを聞いて、男は呟く。

「鵬 真言、か。人造人間ロボットの中に入り込み鎖を切断するなど、普通の魔術師に成せる業ではない」

男は更に写真の下の文字を見る。

次の瞬間、男の口が横に広がる。ニヤリと笑う形になる。

緑の一文に触れながら。

「やっと見つけた」

真言は目を開けた。突然飛び込んでくる真つ暗闇。体の下に固い地面があつて、倒れていることに気付き、ゆっくりと起き上がる。真言は一瞬ここが何処なのか解らなかつた。

しかし、隣に血だらけの少年が倒れているのを見てはつとした。

（俺…戻ってきたのか？あいつの魂あそこから）

そしてあの人造人間ロボットの女性が無事に天に還つたことを知つた。

あんな風に騙されて、女性はどんな気持ちだつただろうか。

悲しみ、怒り、そんなものでは済まないだろう。

真言は軽く目を閉じると、落ちていた白い布を巻き直し、意識の無い少年に目を落とした。

「こいつ…生きてるよな？……大丈夫みたいだ。でもこのままだとマズいな。連れてくつたつたつてどこ行けばいいんだか」

とりあえず真言は、少年の腕を自分の肩にかけ、路地を出た。辺りはもう夜明けの色に染まっている。

誰かに行くわしたらまずいので、真言は慎重に辺りを見渡しながら進んだ。

（あの時の声、誰だつたんだ？）

あの時、鎖を前にした時、聞こえてきた声。あれは何だつたのかと、真言は思う。

（もしかしてこいつが…？でもあの時は意識を失つてたはずで、）  
考えていて周りへの注意を怠つてしまつていた時、ドンツと肩に軽い衝撃を感じよるめく。

「ごっごめんなさい！」

慌てたような少女の声。前には群青色の髪と瞳をした少女が立っていた。どうやらぶつかつてしまつたようだ。

「ごちらこそ……え」

この状況を見られたらちよつとヤバい気が……！

「ごめんなさい急いでいて。あっ、聞きたいことがあるんですけど、

「こちら辺で……っあああああッ！」

その少女は真言に支えられた少年を見て叫んだ。

「あのっこれは……」

今頃気づいたのか?! と思いつつこの状況をなんとか回避しようと焦る真言だったが。

「せ、切磋さん!」

「え……?」

少女がその名前を叫んだことで、とにかく焦りは静まった。

(こいつ、切磋っていうのか。で、この人は切磋の知り合い……?)

「何があつたんですか?!」

少女が興奮ぎみに詰めよってくる。

「ええつとあの……」

「もしかして、ロボット人造人間のこと何かあつたんですか?!」

「なんでそれを?」

真言は、少女がロボット人造人間を知っていることに驚いた。

「やっぱりそうでしたか。ごめんなさい、興奮してしまって。それでロボット人造人間は?」

「えつと、俺途中からしか見てないんだがな……こいつ相当やられて

たみたいで。それでなんとかロボット人造人間消してきたんだけど……」

「そう、ですか。詳しいことは後で教えてもらってもいいですか?

この方の治療は私がやります。あなたもついて来てくれますか?」

「あ、ああ」

こうして、真言は少女の家に向かうことになった。

## 第5幕・戦う者（後書き）

結局、切磋さんは名前が明かされただけでした。でも切磋の秘密はこれからを通して解っていくと思います。

次回、少女の名も明かされます。

切磋「次回。“記憶”だ。よろしく。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3447v/>

---

CrossWord

2011年9月5日21時35分発行